

(別紙2)

審査の結果の要旨

論文題目『近世日本の社会と仏教—教団構造と寺檀関係とを中心に』

氏名 朴澤直秀

本論文は、近世における仏教を素材に、宗教と社会との関係を教団の構造と寺檀関係を中心に論じたものである。内容は二部・8章から構成され、これに序章と終章が付されている。

序章で研究史や本論文の課題が提示された後、第一部「宗教施設と教団構造」では、近世中後期の関東における新義真言宗について取り上げ、田舎本寺を中心とする「地方教団組織」の性格が検討される。まず1章では、武蔵国平山村法眼寺をはじめとする在地寺院の運営を、世話人体制、収支構造、檀家組織との関係などから分析する。そして檀家組織や村と僧侶集団との関係を媒介する宗教施設の位置について論ずる。2・3章では、安房国における新義真言宗の寺院組織と僧侶集団の構造が解明される。その中で、まず平郡府中村宝珠院に残された史料から、寺院の本末組織、田舎本寺による一国寺院の統括、衆分組織などの諸点から、寺院組織が明らかにされる(2章)。そして、安房国の新義僧が智積院において組織する「組」や、座順をめぐる争論、住職交代などの事例分析を通じて僧侶集団の特質を考察する(3章)。さらに4章では、特定の寺院に子弟を入寺させる家=寺元の事例を紹介する。

第二部「寺檀関係論」では、宗教施設を媒介として僧侶集団が村や地域と結び結ぶ諸関係が、多様な事例を通じて分析される。5章では、越後国与板地域の真宗寺院を事例に、寺檀関係の錯綜する状態の下での檀家組織や、宗教施設と民衆との関わりが多面的に検討される。6章では、在地社会における檀家組織と寺院との関係が、檀家組織の世話人・代表者の性格を中心に分析される。ここでの事例は、1・7章と同じ武蔵国平山村である。続く7章では、平山村法眼寺を主な素材にして、祈祷寺檀関係や祈祷檀家組織の特質を、宗判(葬祭)寺檀関係と比較しながら検討し、葬祭と祈祷とを対蹠的に扱ってきた研究動向を批判する。最後に8章では、一家一寺の寺檀関係をめぐる幕府や藩の法令を分析し、寺檀制度に対する幕藩権力の政策意図や、教団・民衆側の観念を検討する。これらの内容を受けて、終章において論点の整理と残された課題が総括的に述べられる。

本論文は、①近世における在地寺院と周辺社会との関係について、多様な素材からきわめて緻密に検討し、多くの実証的な成果を上げていること、②地方教団組織、檀家組織、祈祷寺檀関係、宗教施設と場の問題などをめぐり、いくつかの斬新な論点を提示していること、などの点から、近世宗教社会史研究の新しい水準を切り開く内容を有す顕著な成果を上げている。素材とした地域や時期にやや偏りがあり、また近世史全般に関わる論点の展開の面で若干物足りなさが残るなど、残された課題も多いが、上記のような成果に鑑みて、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に十分相当するものと判断した。